

# まちでみつけた



まちで見つけた、子どもたちの笑顔を紹介します。投稿写真もお待ちしていますので、役場総務課まで送って下さい。



# いい顔・かお

12月に南部中学校1・2年生の希望者40名が、山青年の家で一週間生活をしながら学校に通う宿泊通学体験「大山ウインターハウス」を行いました。この活動は、思春期の中学生が「自分」と「家族」「先生」「友達」とのかかわりを振り返り、「自分らしさ」を見つめ直すことが目的です。集団での食事や入浴をはじめとして、生徒によっては家ではほとんどしたことがない掃除や洗濯、自主学習(約2時間)などをします。テレビやビデオを見たり、ゲームをしたりすることはできません。また、お菓子を食べたり、ジュースを飲んだりすることもできません。「飲めるのはお茶だけ。かかわれるのは人だけ」という、ふだんの生活からかけ離れた環境になります。

しかし今回、昨年に引き続き2年度目の参加をしてくれた2年生が18名(リピーター率75%)もいました。また、最終日のアンケートでは、40名中33名が「来年も参加したい」と答えています。

さて、家族とは一週間会えない訳ですから、当然いつもより家族のことを考えるようになります。その上、保護者には、面と向かつては照れくさくて言えないことや親の心情を吐露するように手紙を書いていただきました。先生方には、ふだん学校では語ることのない自分「オセの話」を毎晩交替でいただきました。教師という枠を超えて、一人の大人として自分の中学校時代、特技、趣味、願いなどを語っていただきました。そして、友だちとは、学校と青年の家の生活24時間、しかも6泊7



## 子どもは地域の宝

~大山Winterハウス~

日間を共にする訳ですから、互いに自分自身が包み隠さず出てしまえます。それを認め合った上で付き合っていくことの楽しさを感じて欲しいと思います。

ボランティアの泉絵梨子さんと山本香織さんは、女子生徒のいろいろな思いを受け止めてくれ、岡田岳大さんは、姿が見えないときは必ずと言っていいほど男子生徒と体育館で遊んでくれました。また「オセの技」でお世話になった景山毅さんは、子どもたちのためなら、「高年齢のお父さんと一緒に駆けつけてくださいました。アフリカのことわざで『子どもが育つには、村中の人が必要だ』という言葉があるそうです。この一週間、生徒を取り巻く人たちは本気で取り組みました。あの言葉と共に「家族のありがたみも感じました。あと、家族の中の私の存在性も感じる事ができてよかったです」と書いてありました。

人とかかわること以外には何もなく、不便で不自由な生活だからこそ、大切なものに気づいてくれた一週間だったように思います。

地域教育担当 唐来 秀夫



家族からの手紙